

西照

西照寺寺報「さいしょう」

第18号

2007年8月17日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40

祠堂永代経 勤修

左記のとおり今年度の祠堂永代経をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつめの時間

八月二十四日(金) 午後二時～

二十五日(土) 午前九時半～

午後二時～

(太子講併修)

布教使 公文名真師 射水市市井光照寺住職

西谷山 西照寺

むざい しちせ
無財の七施

お金や財産やなくても、だれにでもできる七つの布施があります。

◇やさしいまなざし(眼施) げんじせ

◇なごやかな顔(和顔悦色施) わげんえつしきせ

◇やさしい言葉(づかい)

(言辞施) げんじせ

◇あたたかい心(心施) しんせ

◇心のこもった行ない(身施) しんせ

◇すすんで座席をゆする

(床座施) しょうざせ

◇住まいをきれいにして気持

ちよくする(房舎施) ぼうしゃせ

請求書と領収書

小学校四年生のケンちゃんは、お母さんに毎月三百円の小遣いをもらっていました。ところが、いつも直ぐに無くなってしまいます。お小遣いを上げてほしい。でも、お母さんはきつとダメと言うだろう。そこで、思い悩んだケンちゃんは、ある日お母さんに請求書をだすことにしました。

「この前、八百屋さんにお使いに行ったの五十円、食事の後片付け手伝ったの三十円、フトンの上げ下ろしをしたのが二十円、……合計三百円ください」

ケンちゃんは思いつくままにいろいろ考えて、お母さんに請求書をだしました。

すると、それを見ながらニコツと微笑んでいたお母さんは、次の日に

「この前、ケンちゃんが風をひいて熱をだして寝込んだときに、寝ずに看病したのが〇円、洋服のボタンがとれて困っていたのを縫ってあげたのが〇円、いつも食事を作ってあげているのが〇円、……合計〇円。お母さんはケンちゃんが仏さまの教えをよく聞いて、いつも優しく、素直な子に育ってくれるように願っています」

今度は、お母さんの方からケンちゃんに請求書がきました。

その時、ケンちゃんはハッと気がつきました。

一体何に気がついたのでしょうか。

そんな話を時折、お寺の子供会で話すことがあります。

以前でしたか、「おっちゃん、その話小学校の教科書に載っている」と言ってくれた子がいました。よく聞いてみると小学校の副読本に同じような話が載っているそうで、全国的にもよく知られた話のようです。

さて、ケンちゃんは一体何に気がついたのでしょうか。

それは、ケンちゃんが請求書をだす前に、お母さんからたくさん愛情やはたらきをいただいていた。つまり、請求書に対すれば、お母さんからいっぱい領収書をいただいていたということだろうと思います。

私たちは、自分の思いが叶えられたならばと、お金が儲かりますように、立派な家が建つように、子供がこの学校に入学できれば、あの人がもっと心がけてくれれば、……とまわりに請求書を乱発しています。そして、それが満たされたなら、幸せだ、安心だ、満足だという日暮らしをおくっています。

しかし、自分の命というものを仏さまの教えから照らされるとき、全く一方的に与えられた世界に成り立っていた命だったと気づかされます。頼んだわけでもないのに両親や家族からたくさん領収書をもたらしていた。目に見えないいろんな働きや大自然の恵み、もつと深くには、私の生死を貫いて働いてくださっている阿弥陀の働きがありました。

北原白秋は、

「薔薇ノ木ニ 薔薇ノ花咲ク ナニゴトノ不思議ナケレド。

薔薇ノ花 ナニゴトノ不思議ナケレド 照リ極マレバ木ヨリコ

ボルル 光リコボルル」

と薔薇一輪の中に、大自然の私へのはたらきを、領収書をいただいていたことを、感動を込めてうたっています。

改めて、私たちは請求書をだしてしか生きられないのかもしれないかもしれませんが、それ以前にたくさんさんの領収書をいただいていることへの気づきの大切さを教えられます。

お母さんからの領収書に気がついたケンちゃんはどうだったのでしょうか。やはりうれしかったんじゃないでしょうか。しあわせを感じたに違いありません。

おふせ 御布施の二ころで

仏教では、さどりの世界を彼岸ひがんといいますが、それに対して、この世は、迷いの此岸しがんになります。迷いの此岸から、煩惱の川や海を渡つてさどりの彼岸に至る。そのために六波羅蜜ろくはらみつという六つの実践徳目があると説かれています。六つとは、布施、持戒、忍辱にんじく、精進、禪定、智慧のことです。波羅蜜はらみつとは、到彼岸とうひがんと訳され、彼岸さどりに到る行と説明されています。

この六つの行の最初にでてくるのが布施であり、仏道を歩もうとするものにとつて最初の入り口となるべき、大切な徳目ということになります。意味は、漢字の通り、あまねく(布)ほど(こす)施、他に与えることです。あまねくですから、わけへだてなく誰にでも平等にということとす。別な言い方をすると、自分への執着を捨てるということ

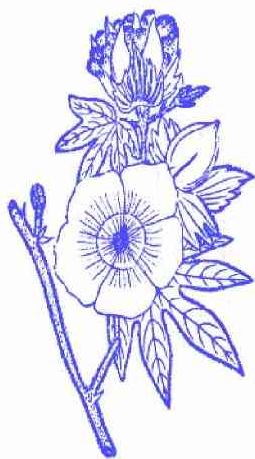
です。

私たちは、自分の執着が満たされることが、請求書が満たされることが、幸せだと日暮らしを送っています。しかし、自分への執着を捨て、私の命の立脚地がそうであるような、領収書の精神に立ち返っていくことが、仏さまの二ころに近づく大切な最初の一步である。そしてそう気づくことが、本当の幸せなんだということを仏教は教えてくれているように思います。

この布施には、財物を施す財施ざいせ、法を説く法施ほうせ、無畏むい(おそれなき心)を施す無畏施むいせの三つがあると説かれています。

門信徒の皆さんとお寺やお坊さんは、門信徒の皆さんからは財施を、それに対して、お寺やお坊さんからは法施(読経や法を伝えていくこと)をとという布施の関係で成り成っています。読経に対する料金を「御布施」というのではありません。料金価格があるのならば、それは請求書の世界ですし、商売の関係になってしまいます。

世の中に、布施の精神で成り立っているお寺やお坊さんがいるということとは、人間にとつて何が大切なのかを形や身をもって伝えていくこととして一面もあるように思います。(文責 住職)



真宗の行事

< 降誕会 >

しゅうそしんらんしょうにん

宗祖親鸞聖人のご誕生をお祝いする法要（集い）を降誕会とといいます。

親鸞さまは、平安時代の終わり頃、1173(承安 3)年 4 月 1 日、太陽暦にして5月21日、京都の東南にある日野の里でお生まれになりました。

父の名は、日野有範ひのありのりといい、藤原氏のながれをくんでいて、皇太后に使える「皇太后宮大進」こうたいごうのたいしんという官職にありました。のちに出家して三室戸大進入道みむろのだいしんにゅうどうと呼び、三室戸に隠遁されていたようです。生母は、吉光女きっこうにょといい親鸞さまが8歳の時に死別されたと伝えられています。

当寺は、貴族政治が終焉を遂げ、平氏と源氏が政変を繰り返すという混沌とした世の中でした。政変に敗れたものは出家すると罪や命が免ぜられるということもあったようで、父の有範も政変に巻き込まれて出家されたものと推測されています。

親鸞さまは、幼くして両親と別れ、お父様の兄である日野範綱ひののりつなという人に育てられています。男兄弟5人の長男でして、兄弟すべての方が出家されています。このような状況から、日野家の衰退、親鸞さまを取り巻く環境の厳しさがうかがわれます。

そして、9歳の時、範綱卿のすすめもあり、出家得度され、比叡山に登られています。

お坊さんになる得度の式を受けるため、天台座主の慈円てんだいざすじえんさまのもとを訪ねますが、夜遅くであったため、「明日に式をしましょう」といわれました。ところが親鸞さまは、

「明日ありとおもう心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」

明日はどうか分らない身であるから、今お坊さまにしてくださいとその決意の深さをうたわれたと伝えられています。

以後、自分の生きる意味と使命とは何かを仏教の教えの中に問い聞いていかれました。

29歳の時比叡山を下りられ、法然さまとの出会いをとおして、すべての人々を救うという阿弥陀仏の願い（本願）の中に、自分の生きる意味と使命がいてあてられていたと気づかされます。それからは、お念仏申す人生こそ、すべての人が救われ、迷いを乗り越えていく道であると、人々に教え伝えてくださいました。

35歳の時念仏の弾圧に遇い越後の地へ、その後関東の地をへて、62歳頃に京都に戻られています。1262(弘長2)年11月28日(太陽暦では翌年の1月16日)弟の尋有僧都じんうそうずせんぼういんの善法院で、90年の生涯を閉じられました。

まことに、本願を人生の究極の拠り処として生き、悩み多き人々に本願念仏ほんがんねんぶつの教えを説き続けられた力強い御一生でありました。

親鸞さまの誕生は、ただ人間として生まれてきたということだけではありません。真実を私たちに説き弘めるために真実の世界から降りてきて下された降誕こうたんして下された方ということで、お敬いの気持ちから降誕会の法要を営ませていただいています。

西照寺では、毎年5月8日前後に宗祖の降誕会をお勤めしています。

